

ここでいう「記憶」とは個人あるいは集団が持つ思い出や経験のことだろう。そういう意味で、個別的で絶対的である。一方、「歴史」とは国による政策や外交や戦争のように権力の一連の動きである。検証を経て後世に伝えられた過去の事象であるため、誰でも知っている。あるいは容易に知ることができる。その意味で、俗的で相対的である。

例えば、フランス革命について教科書には「国民公会では、急進共和主義のジャコバン派が力を増し、ルイ16世が1793年1月に処刑された」と記されている。これは歴史だ。また、資料集では処刑をめぐる国民公会の表決について、無条件の死刑が387票で最多、その他の刑が334名でその内訳は鉄鎖刑2名、禁錮刑かつ追放刑286名、執行猶予付き死刑46名であったと説明されている。これも歴史だ。さらにその死刑執行人は王党派でルイ16世の知己のシャルル＝アンリ・サンソンという人物だったという。絵画に描かれる彼の表情は苦悩しているように見える。彼の心の中にあるもの、そこまでたどると「記憶」になる。もはやフランス革命という「歴史」からは切り離され、「歴史」とは無関係の個人的経験になったかのように見える。

ノラは「歴史の真の使命」は「記憶を破壊し抑圧すること」と言い、「生きられた過去から正統性を奪う」と指摘している。確かに、フランス革命の例で見たように「記憶」と「歴史」は対極にあるように映る。ただ、私は「記憶」と「歴史」がまったく別物かというところでもないように感じる。過去の記憶は、過去の事象が現在にどのように継承されてきたかを知る糸口であり、それも時間というフィルターを経ているという点で「歴史」性を帯びているからだ。私は教科書が教えてくれる一連の流れとしての「歴史」の重要性を認め、その「歴史」を複眼的に考察するための「記憶」にも注目したい。現代に伝えられた「記憶」の中には、きっと複雑な現代を読み解くカギがあると考えられているからだ。